
SD試作

和井

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SD 試作

【Nコード】

N1794Z

【作者名】

和井

【あらすじ】

私立開盟学園で行われる学校見学会。今年の見学参加者は実に個性的な面々で…。果たして無事に見学会は行われるのか？

プロローグ1（前書き）

初めて投稿の初心者です。知識も大変偏っておりますので、気になるところが多々あるかと思いますが、海よりも広く深い心で読んで下さると幸いです。

プロローグ 1

プロローグ SIDE開盟学園

「これより定例会議を行う。議題は今月末に行われる中学3年生を対象とした高校見学会についてだ」

凜とした声が部屋に響き、最高学年に進級し、生徒会長としての貫禄が身についてきた椿の視線が生徒会執行部面々に注がれる。

私立高校である開明学園は例年5月に近隣の中学3年生を対象とした高校見学会を行っており、生徒会執行部にとって、教師主導の入学式よりも業務の比重はこちらの方が重い。生徒の自主性を重んじ、生徒会による学園自治を謳う学園の姿を實際目に見える形で紹介する行事だからだ。開盟学園はその校風と、門戸の広さで人気が高く、毎年結構な競争倍率になるので見学会の参加者も多い。学園で行われるのは生徒会主導ということもあり、主に部活動の体験入部みたいなものになるのだが、スポーツ推薦を考えている中学生にとっては重要な行事となる。なにしろ中学生にとっては青春時代の大事な3年間をかけるに値する学校かどうかの品定めであり、高校側にとっては来年の新人部員の下見も同然なのだから。

「例年通り、体育会系部活動については推薦枠希望の中学生代表チームとの模擬試合という形式になると思うのだが？」

「主だった運動部の体育館及び校庭の使用申請はもう出ておりますわ」

「剣道部、柔道部、空手部からは格技棟での模範演技の申請も来ています」

「チアリーディング部が応援を兼ねて体験会を開きたいと申し出て

いる、とお伝えください」

「試合参加希望者のリストは既にあがっております。会長」

「今年は仕事が早いな。助かる」

皆、執行部員としては当然のことと返事はするが、なにしろこの学園の部活動の数は半端ではなく、その把握、絞り込みだけでも大変な作業だったに違いない。大体は毎年それ程差は出ないのだが、昨年は料理クラブ主催の料理教室が女子に非常に好評だったり、クイズ研究部主催のクイズ大会や、開盟ロツクフェス優勝チームの野外ステージなどが一般見学者に大好評となった。当時、副会長として実務をとりしきっていた椿としては、殆どただのお祭りじゃないかと内心憤慨しつつ、尊敬する安形会長（当時）の大抵は思い付きの催しを企画運営したのだが、今こうして己が会長職に就いて昨年の見学会を思い出すと、是非今年の参加者も皆笑顔で楽しんで欲しいと思えるようになっていた。

料理クラブについては、残念なことに講師役の榛葉が卒業したこともあり昨年までのような人気は期待できないが、それでも普通の高校レベルを超え、料理学校レベルの設備は魅力的だろう。他にも丹生の意向により色々改造された学園設備は、女子学生に熱狂的に受け入れられ、今回もその都市伝説レベルの設備を見学したいという女子中学生の数は尋常ではなく、定員数を超えた為に断られた女子は悔し涙を流し入試でのリベンジを誓ったという。このまま女子高になってしまえばもう勢いだが、そのような方針は理事会が決めることと思考放棄したのはつい先日のことだ。

文化系部活動については、昨年と同じくクイズ研究会主催のクイズ大会、軽音楽主体の野外ステージ、放送部による試合中継といったところが主体となる。本来、文化系部活動の見せ場は文化祭であり、見学会では運動部に見せ場が譲られる。もっともあくまでも見学会であるので、時間を短く区切られた模擬試合となるのだが、高校生チームvs中学生チームという催しは応援するもの達を含め結

構な盛り上がりを見せる。

「当日のタイムスケジュールは過去の資料を参考にするとして、試合参加者の決定は各部顧問と部長に委ねるということでいいな」

試合参加希望者のリストを種目別に分けたものを各部室に届けさせる。希里の手にかかればあつという間の仕事だろう。

「ただいま戻りました。会長」

「早ッ！本当に早いな、キリは」

「いえ、自分などはまだまだ未熟です。次は何を？」

保健医及び保健委員への協力要請、放送部の試合中継の準備の確認等、さくさくと片付けられていく仕事の山。希里が連絡役を務め、その間に椿と丹生が各部の催しの時間調整、宇佐見が申請された諸経費の申請書を取りまとめ、浅灘が来期の執行部の為に記録を残す。生徒会執行部としての理想形がそこにはあった。

「おおまかなところは大体できたな」

「細かな調整は各部からの返事を待ってからですわね」

「W K J（私達ならこれで上出来だろう）」

「ご苦労様です、とお伝えください」

「飲み物は何を買ってきましようか？」

一段落した頃合いで、非常に気の利く（パシリの才があるともいう）希里が休憩の用意をする。学校全体が一丸となって行う催しだけに、執行部だけで行える準備も限られている。各部活動や委員会、教師陣と連携をとりつつ片付けていくしかないだろう。

「ところで当日の巡回だが」

「KSK（休憩中に仕事の話をするな。空気ヨメ）」

縄に伸びそうになる手を必死に抑える希里の姿に、立派に成長してくれて嬉しいぞ、などと思う椿。気分は父である。

「いや、君達も見学したい企画などがあるだろうしな。希望があるなら先に言ってくれると順番が決めやすいのだが」

生徒会主催の行事であるので当日の執行部の忙しさは半端ないだろうが、巡回のついでの見学くらいは良いだろうという寛容さは椿の成長の証と言えるだろう。

当日の執行部員は本部にて不測の事態に備えつつ、催事が滞りなく進むよう調整するために現場を見て回るための巡回をする。各クラス委員も勿論校内の案内や説明係として存分に働いてもらう予定だが、全体の進行状況は執行部が抑えねばならない。なにしろ様々な学校から見学者が来るのだ。何の問題も起こらない確率などゼロだろう。

「自分は会長と同じ時をお願いします」

警護も兼ねますので、とさりとて言う希里に頭痛を覚える椿。当日の忙しさを思えば、この2人1組はとてまじやないが無理だ。まして警護なら女子にこそ必要だろう。丹生には家からSSがつけられていたとしても驚かないが、浅雛や宇佐見はそうではない。そんな二人をこそ心配しろ、と心底思う。ましてや宇佐見は極度の男嫌い故に巡回役は期待できない分人手が足りない。なにせよ自分は男であるのだし、格闘技も齧っているのだ。常ならば希里のこのような自分への接し方も、本人の自由と流せるようになってはきたが、今回ばかりはそうもいってられない。

「学校内で警護など必要ないだろう」

「いえ。多数の不審者が来校するのです。このような時こそ警護は必要です」

「待て！不審者じゃないぞ！見学者だ！！」

「身元不詳には違いありません」

「普通の中学生が危害を加えるわけがないだろう！」

「僅かな油断が命取りになるのです。今時の中学生は侮れません」

「未来の後輩になんてことを言うんだ！」

「会長の身の安全をはかるのが自分の役目。たとえ御不興をおおうとこればかりは譲れません」

「あの、よろしいですかしら？」

ヒートアップしつつあった椿と希里の応酬に、浅雛の冷めきった眼差しと丹生のほんわかした言葉が向けられる。

「なんだ？今、会長に御身の尊さについて自覚を持っていたかどうか」と

「たかだか高校の生徒会長職をなんだと思っているんだ！」

既に椿はキレる寸前である。そんな椿の様子など意に介すような女子部員ではない。

「このような時こそスケット団にお願いしては？」

「「は？」」

一瞬思考停止する二人。

「ちよつと待て！スケット団も部活動の一つ。そのような権限は与えられない！」

「そつだ。会長をお守りするの俺の役目だ」

「ですから、スケルト団の活動内容を見学者の皆さんに理解していただくために、お手伝いをおねがいしてはいかがかと」

「YBA（要は便利屋だからな、あいつらは）」

「だが、この行事は生徒会の主催であつて…」

以前ほどの蟠りは無くなったとはいえ、基本融通の利かない椿にとっては生徒会の職務をスケルト団に手伝ってもらうなど言語道断なことなのだろう。だが見学会の多忙さについては、去年実務を取り仕切った椿が最も身に沁みて知っていることである。見学会の在り方を、一昨年までのありきたりな形のものに戻せば仕事量は減るであろうが、尊敬する安形が創り上げた（というか思いついた）昨年の見学会の在り方を椿は気に入っており、今更元に戻すという方針はとりたくない。

「大体あいつらのことだ。もう他の部活から助っ人の依頼がきているのではないか？」

なんだかんだいわれながらも、すっかり学園の頼れる存在となつたスケルト団のことだ。既に他の部活から依頼が来ているのは確実だろう。本当に腹立たしいことだが。

「なにも一日ずつとなんてお願いする必要はありません。巡回の時のパートナー役だけでもお願いできればだいぶ助かると思うのですけど」

「そうすればウサミも巡回にまわれるな」

ぐうの音も出ない。椿としても内心不安ではあつたのだ。不特定多数の人間が出入りする校内を女子一人で巡回させるなど。昨年は執行部に男子が3人いたのでどうにかなつたが、今年は2人しかい

ないうえに、基本本部から動けない会長である自分とあの希里である。クラス委員に協力を要請するつもりではあったのだが、昨年度を大幅に上回る見学希望者の応対役に、むしろクラス委員の方がオーバーワーク気味である。一人でも多くの中学生を受け入れたかったが、やむを得ず定数制限を設けてしまったほどなのだ。

「とりあえず話だけはしてみよう」

がつくり頂垂れながら返答する椿。主の疲れ切った姿に慌てて甲斐甲斐しく世話をしようとする希里をみながら

（あとはキリの説得だな……）

なんだか始める前に虚脱感に悩まされる椿であった。

プロローグ1（後書き）

やっとの思いでここまでです。見学会当日まで自分の方が持つのが心配ですが、コッコッがんばろうかと思いますので、長い目で見守って下さると嬉しいです。

それにしてもギャル語と関西弁がわかりません。

リポーンメンバーは影も出てません。すみません。今しばらくお待ちください。

プロローグ2（前書き）

ようやくの並盛サイド。原作を最近読んでいないため、矛盾点は多々あるかと思われませんが、このような拙作を読んで下さる方々のスルースキルに頼らせていただきたいと思います。

プロローグ2

プロローグ2 SIDE 並盛中学

平和って素晴らしい！

全人類に共通するであろう感情だが、今時の中学生で、この中学程この言葉を身に沁みて実感できる学校はないだろう。

「僕はいつでも好きな学年だよ」

と素敵に言い放って下さった並盛中学校風紀委員長雲雀恭弥がとうとう卒業してからというもの、並盛中は常春の状態であった。トラブルメイカーという意味ではまだ爆弾魔や爽やか腹黒バットが在学するものの、そちらの方は手綱を握る人物も纏めて一つのクラスに放り込んでおいたので無問題である。歩く理不尽の存在に比べれば可愛い物だと思えるようになった彼らは哀しい程常識というものが世間一般からずれていた。

並盛中学における最後の魔窟と呼ばれている3年のとあるクラスにおいて、担任及び一般人な生徒一同はトラブルメイカーズの扱い方を嫌というほど理解していたので、当初の懸念より平和な学生生活を送っている。遠くから眺めている分には非常に目の保養になる分、今ではかえってこのクラスになれたことを喜ぶ生徒も多い。

中でもダメツナこと沢田綱吉にとっては、憧れの笹川京子と同じクラスというだけで毎日が天国である。ともに同じクラスになった黒川花には「かわりばえのしないクラス」と文句を言われたが、そんなことは綱吉の所為ではない（はずである）。中学も3年に進級すると早速高校受験の話が始め、

(京子ちゃんと同じ高校なんてむりだよな)

以前に比べればだいぶ前向きで明るくなったと周囲の評価も変わり始めた綱吉でも、一朝一夕に学業面の成績は伸びない。何しろスタート地点が遙か後方彼方すぎるのである。補習仲間の山本も3年で部活を引退すれば、元々要領は良いのだからソコソコ成績は伸びるのだろう。獄寺は言うにもがな。もっとも将来の職業が決定している彼にとって、日本の学歴などミジンコ程の価値もないので、あっさり綱吉と同じ高校を受験しそうである。外見や生活態度から大人に眉をしかめられることの多い彼だが、成績だけは文句のつけようがないので、そんな彼が成績が墜落寸前の低空飛行な綱吉と同じ高校を受験するなどとなれば、絶対一悶着あるんだろうな、ということは超直感でなくとも分かる。この面子で和気藹藹と楽しく過ごせるのも今年で最後かも、と思うと一日一日がとても愛しい。登校するのが苦痛だった頃からは劇的な変化だが、思春期特有の甘酸っぱい悩みに胸を痛める綱吉も段々大人へとなってきたのだろうか。

(流石十代目。悩む姿も渋いつす)

ボーっとしている綱吉の傍で悶絶している獄寺の姿はナチュラルにスルーされるクラスである。

「ねえ、ツナ君」

今まさに想いを馳せていた京子に声をかけられ、それだけで空も飛べそうな気がする綱吉だ。(実際飛べるじゃねえか、とりボーンあたり突っ込まれそうだが、そんな些事を気にしては今頃綱吉の胃は崩壊している)

「なに？京子ちゃん」

「あのね、今度一緒にこれに行ってみない？」

(京子ちゃんからデ、デ、デートのお誘い!?)

ポンつと音が聞こえそうなほど真赤になる綱吉だが、世の中はそこまで彼に甘くない。

「なに勘違いしてるんだか簡単に想像つくわよ、沢田」

「黒川も一緒なんだ…」

途端にテンションも通常モード。大体この年頃の男子なんてこんなもんである。

「花が、今度皆で行ってみないかって誘ってくれたんだけど」

手渡されたのは一冊のパンフ。中学3年生には見慣れはじめたものである。ただ、他と違って、学校案内というより、どちらかというと学園祭の案内っぽい感じの物だ。

「私立開盟学園見学会？京子ちゃん、ここ受けるの？」

「進路はまだ具体的に決めてないんだけど、ここの見学会って面白いって評判らしいの」

「申し込むなら早くしないといけないらしいから、適当に声かけてみただけよ。女だけだと面倒だし」

京子も黒川も美少女の範疇に入るので、確かに二人だけだとおちおち見学にならないだろうという黒川の見解は客観的にも非常に正しい。

「開盟ってスポーツにも結構力入れてんのな」

「結構距離がありますよね。大丈夫です。10代目を電車に乗せるなんて危険な事はさせませんから！是非タンデムで！」

いや、一人で乗れるし、というツツコミはやめておく。明らかに道交法違反だし。

「山本、ここ知ってるの？」

「詳しくは知らねーけど、部活の先輩が推薦で入ってるのな」

「山本は全国区でスカウト来てるよね」

もし山本が他県の野球名門校に進学すれば、休日でも顔を会わせるのは無理だろう。気分が沈んでいくのが分かるが、自分の我儘で山本の進路を左右するわけにはいかない。実際彼は超中学級の逸材とスカウトの話が降るよう来ている。

「野球馬鹿はどっか遠くの学校で野球でもしてやがれ」

「別に野球は何処でもできるし、店の手伝いもあるから、近所にするつもりなのな」

大事な親友の言葉に気分が再浮上する。近所の高校なら応援に行ったりで顔も見れるだろう。

「お兄さんは並盛高校だよな」

てっきり兄想いの京子は、了平と同じ高校に進学するのかな、とも思っていたのだが。

「お兄ちゃんの話だと並盛も楽しそうなんだけど、色々見てから考えようかなって」

「それに並盛っていったら、来年はどうなってるかわからないわよ」

この春、常春状態を迎えた並盛中学に対して、恐怖の極寒ブリザードにさらされたのが並盛高校である。了平だけなら、まあ行動や言動はアレだが本人はいたって気の良い兄貴肌である。だが、何の因果か雲雀恭弥も進学している。彼の並盛への深い愛を知っている者からすれば納得の選択だが、彼の入学を許可した教育委員会はさまざまにストレスにさらされたことだろう。あとは並盛高校の教師陣の胃と神経の無事を祈るしかない。ついでに養毛剤も必要であろうか？

一同同じ結論に達したのか若干蒼褪める面々。来年の受験者数は過去最低記録をぶちぬくこと間違いなしだろう。誰だって敢えて凶暴化した虎の檻には入るまい。そんな環境にこそ生徒を放り込みそうな家庭教師の存在を知っているが、ここは是非全力で拒否させていただきたい。人外の範疇には入りたくない切に願う綱吉だが、彼は既に人外認定を受けているという事実を知らない。

「ごめん。うっかりしちゃって」

先程の言葉は京子に凶悪な人食いサメの群れに飛び込むのか、と聞くのに等しかったことに気付いて即座に謝る。皆、無意識下である天災大魔王の存在を忘れようとしていたのかもしれない。

「それでどうするわけ？行くの？沢田が行くなら当然あんたたちも一緒なんでしょ？」

「当然だ！何処までもお伴します、十代目！！」

「この試合形式つてのが面白そうなのな」

「じゃあ、山本の試合申し込みも一緒にしておくわよ」

同学年の男子をコドモとみなしててんで相手にしない黒川だが、

それでも誰にも嫌われることなく、そして京子の親友であるのも、この面倒見の良さ故だろう。

「後で詳しいことは連絡するね」

微笑みながら黒川と立ち去っていく京子の姿を、同じく「にこにこ」笑顔で見送る綱吉の表情が凍りついたのは。

「リボンさんは何て言いますかね？」

空気の読めない自称右腕の言葉が発せられた瞬間である。

プロローグ3（前書き）

ヒメコの関西弁が滅茶苦茶偽物です。許せる方だけ読んでやってください。勢いだけで書いてます。

プロローグ3

SIDE 開盟学園

相も変わらず、だらーんと茶をしていたスケッチ団の元に珍しい来客があったのは、つい先程のことである。

「少しいだらうか」

相変わらず生真面目そのものな生徒会長の姿に、ボツスの目が胡乱になる。下手な事を口走らないのは、明らかに忍者を警戒しているのだらう。流石にクナイと共に刻み込まれた恐怖は彼に学習能力を与えたらしい。

「一人なんて珍しいやん？どないしたん？」

「ああ、キリには今度の見学会の準備を任せてきた」

会長至上主義の加藤がダダをこねる姿が容易に想像できるが、どうやら彼もスケッチ団を（というより鬼塚を）少しは信用するようになってきたらしい。

「それで何の用なん？」

「実は依頼したいことがあってな」

「珍しいな、椿。ようやく兄の偉大さがわかったか」

途端に調子にのるボツスに、（あかん、やっぱり学習しとらん）と呆れたのはスイッチも同様だらう。あの忍者なら、主に盗聴器をしかけていても驚かない。後で、こっそり確実に粛清の血の雨が降

りそうである。

『しかし、本当に珍しいな』

「今月末の見学会が予想以上に希望者が殺到してしまっただけだ」

即座の話題転換にGJとスイッチをこっそり称える。確かに椿の様子を見るとやや疲れが見える。何事も全力投球、努力の人の典型例なので、前生徒会長のように息抜きをするということがないのだろう。まあ、前会長は抜き過ぎではあったが。それでも普段は優秀な執行部面々のサポートもあり、生徒会も順調に運営できているようだ。会長自らスケッチ団を訪ねてくるとは、本当にギリギリなのだろう。

実際の所、スケッチ団のもとにも見学会関連の依頼が舞い込み始めている。

「君たちも良く知っている事かと思うが…」

椿の話は至極納得のいくものであった。一昨年まではいたって普通の高校見学会だった行事が、前会長の思い付きでお祭りじみたものになった経緯は彼らも知るところである。それでも去年は例年並みの来校者数だったので、執行部やクラス委員の力でどうにか乗り越える事はできたらしい。だが今年は、去年の見学会の予想以上の評判の良さで、見学希望者を捌く段階でかなりの超過勤務らしい。それだけならばまだどうにかなるといえるのだが。

「巡回か。生徒会も大変だな」

『確かにあの面々では無理がでるな』

会長の椿は普段は生真面目なしっかり者だが、実は天然。副会長の丹生はいかにもな良家のお嬢様だが、何事も金銭で片付ける傾向

があり、書記の浅灘はドS。会計の宇佐見は二重人格で、庶務の加藤は自他共に認める椿至上主義。個性的の一語ではすまない濃さである。

「せめて自分とキリが別々に巡回に周れば済む話だとわかつてはいるのだが」

「まあ、あの加藤が承知するはずあらへんな」

普段の学園生活でも警護としてくつついてるのに、「見学会では別行動しろ」なんて命令は、椿が口を酸っぱくして言おうが聞くわけがないだろうということは簡単に想像がつく。

「相つ変わらず過保護だよな。あの忍者」

『あれが彼の存在意義なのだろうしな』

いつもはボツスの言葉には反論する椿も返す言葉が無いらしい。おそらくこの部室に来る前にも、不毛な言い合いを繰り広げたのだろう。

「まあまあ、ええやないの。巡回の時のパートナー役やる。おいたする奴がおったら、このヒメコ様がぶちのめしたるで」

「いや、暴力騒ぎも困るのだが」

ヒメコが自分を励ますために叩いた軽口だとわかっているのか、口では咎める椿も表情は穏やかだ。

『当日は放送部の応援を頼まれているが、時間の融通はつく』

「うちもステージの手伝い頼まれとるけど、なんとかなるで。ボツスは？」

「まあ、大体裏方ばかり頼まれてっから、どうにかなると思う」

スケジュールを確認しながら、なんの蟠りもみせず、即座に協力体制を敷いてくれるスケット団をみると、彼らが学園の皆に頼られている理由がよく分かる。

「では、笛吹と浅雛、宇佐見と鬼塚、丹生と藤崎、あとは自分とキリということをお願いできるだろうか？」

『大丈夫だ。Sの扱い方は知っている』

「ウサミちゃん可愛ええから大歓迎や」

「ああ、任せとけ。兄の偉大さを思い知らせてやつから」

結局、キリはどう説得しようが椿から離れないだろうし、組み合わせとしては順当なものだろうということ、この形でまとまった。いざ会長が行かねばならないような問題が起きた時には、それこそ希里の足ですぐに駆け付けられるという名目も立つ。(もっともどんな運ばれ方をするか想像するのも怖いので、そんな事態は起きて欲しくないものだが)

「ちょっと加藤のことで話があるんやけど、時間ええか？」

「ああ、案外すんなりまとまったので余裕はあるが」

ヒメコの言葉にボッスンが不審者対応になるが、何時になく真面目なヒメコの表情に、黙って部室を出て行く二人を見送る。

『まあ、恋愛相談ではないだろう』

「だ、誰もそんなこと心配してねえっ！」

『おや？あくまで自分の意見を言ったただけだが』

「……………ッ」

『ヒメコにとって加藤は、自分達スケツト団とは別の仲間なのだろうな』

「…わかってるよ」

中学時代に疎外された者同士、そして高校で居場所を見つけた者同士といったささやかな連帯感がヒメコと加藤の間にはある。それはわかってはいるのだが、何故ヒメコが加藤の話をするか気分が悪くなるのか自分でもわからないボツスのモヤモヤ感は暫く晴れそうになかった。

「それで話とは？」

「椿にもとづくに話したことやけどな、うちら中学時代は一人やってん」

今の姿から想像がつかないが、ヒメコが中学時代には伝説の鬼姫と噂されるほどの不良であり、キリが教師ぐるみで学校で孤立させられてきた過去は事実だ。

「それでな、うちがボツスンやスイッチに会って変わったように、加藤も今変わっていく途中や思うねん」

確かにキリは変わった。抜き身のようなギラギラした感じは成りを潜め、今では使命感に燃えて頑張っている事は椿自身が一番近くで見ている。

「あいつ、育ちも複雑そうやし、他人との距離感がいまいち掴めてへんいうか…。まあ、とにかく言いたいのはな、加藤を見捨てない

でやってくれっちゅうことや」

まあ、椿なら心配無いやろうけどな、と続けられた言葉に「当然だ」とかえしつつ、キリのことを思う。きつと今のキリの過剰な忠誠心は、孤独だった中学時代の反動なのだろう。卒業までに、キリの仲間は他にもいるのだと、鬼塚のように心配してくれている人間もいるのだとわからせてやりたい。そうすれば、キリの世界はもつと広がるに違いない。

「いやな、加藤の奴、あんまり椿にべったりやから、うざったい思われてへんやろかとちょっとだけ心配やったんや」

「確かに行きすぎの感は否めないが、それもキリの個性だ」

「ホント、加藤も良い仲間に出会えてよかったわ」

「鬼塚もな」

「ホント、せやな」

時間とらせて悪いことしたな、と謝って部室へと戻る鬼塚を見送りながら、おそらく今頃落ち着きなく自分を待っているだろうキリを安心させるために、生徒会室へと帰っていく椿の足取りは軽やかになっていった。

プロローグ3 (後書き)

関西弁って難しいですね。

本編1（前書き）

捏造と妄想が入れ乱れております。そのようなものが嫌いな方は
読まない事をすすめます。

本編 1

卒業式や入学式、始業式に終業式、もっと身近なところで月曜朝の全校朝礼。校長の挨拶というものはえてして退屈なものである（偏見）。

私立開盟学園見学会当日。無事爽やかに澄み渡った青空の下。見学会開始に先立って、学校長挨拶、生徒会長挨拶、生徒会執行部からの諸注意事項伝達などが行われるのは、学校行事である以上当然のことと言える。救いはスケジュールが厳しい為、至極簡単な物ですんでいることだ。

まあ、参加者の大半は

（あの銀髪の人素敵！）

（胸でけえ）

（キャツ！下剋上萌え！！）

（野球の試合場所何処だっけ？）

とかが気になって大体の話は右から左に抜けている。それでも表面上は真面目に聞いているのは、入学希望者として当然のことだろう。もとより半分遊び感覚の並盛組の関心は山本の試合の方に偏りきっているが。

そんな彼らを、彼らからは決して視認しえない場所から観察するリポーン。もとより彼は自分の生徒を開盟学園に入れようとは思っていない。そんな彼が今回の見学会の参加を認めたのは、気まぐれと暇つぶしも否定しないが、不特定多数他者の中における重要人物警護の体験を獄寺や山本にさせ審査する為である。勿論、そのことは誰にも伝えていない。警護対象のツナにはばれては意味が無いし（知られれば参加しないだろう）、リポーンの意図を察することがで

きるか、という時点から審査は始まるのである。（ちなみに、勿論ツナの警護はリボンがついている段階で最初から万全である）

今の所、ツナの傍にいる守護者は獄寺のみ。山本があっさりと傍を離れているのは痛い、彼は既に試合の準備の為球場に向かっている。ツナに不信感を抱かせない為の行動だったならば仕方がない。本来中距離広域支援型の戦闘スタイルであり、将来的には頭脳戦における活躍を期待されている獄寺は当然リボンの意図を察し、主君にばれないよう警護につとめているがプロの目から見ればザルである。ツナが獄寺の態度をいつものことと（半ば諦めをもって）スルーしているのが、獄寺の普段の態度の賜物といえなくもないが、リボンはともかく他の暗殺者でも今のツナは簡単に始末できるだろう。基本スパルタのリボンでも流石に最初から完璧は期待しない。勿論後で血反吐を吐かせるほどの特訓は行いが、それは彼ら自身が選んだ未来の為である。

暫くは採点をおこなっていたリボンの琴線にふと触れる存在があった。リボンは本来の職業柄、たとえば今壇上に居る人物を暗殺する為には、何処から狙撃するのがベストかと無意識に考える癖がある。天候、風向き、光の具合諸々を考慮し、壇上の人物の動きを予想しポイントをいくつか絞る。職業病ともいえるだろう。そして今壇上で挨拶をしている生徒会長。彼自身は身体つきからある程度鍛えている事は窺えるが、それでも普通の高校生の範疇である。だが、彼を狙撃することを仮定すると、必ずその射線に邪魔が入る。最初は偶然かと思ったが、いつまでも消える事のないその障害物に（壇上の人物の位置がほんの僅かずれてさえも）確信した。彼は、決して他者に悟られないほど自然に生徒会長を警護していた。勿論、リボンの腕ならば暗殺は見戯にも等しいが、プロのガードのレベルに達しているのは間違いない。

(おもしろいヤツがいるじゃねえか)

獄寺や山本の採点も大事な仕事だが、新しい人材のスカウトも彼の仕事の一つだ。並盛町においてあれ程人材が揃っていたのは、門外顧問である沢田家光が拠点を置く町だからかと思っていたが。

(なかなかどうしてジャツポーターも侮れねえってことか)

口角をくつとあげる笑み。もし綱吉が見ていれば、ダツシュで逃げるであろうサディスティックな歓びの顔。

今年の見学会に波乱が満ち溢れる事が確定した。

本編1（後書き）

本編からは視点を色々かえることになるので、細々と書くことになるかと思えます。

本編2（前書き）

話が変わる方向に転がり始めてしまいました。收拾がつかなくなったら取り下げさせていただきます（無責任ですみません）。今回は短くなってしまいました。開盟サイドは載せられそうになったら掲載させていただきます。

今回も妄想捏造注意報発令作品です。

リポーンは立ち入り禁止指定の屋上に来ていた。彼にとって立入禁止の表示などなんの意味も持たない。彼のいる場所からは勿論ツナ達一行の様子も把握できるが、なによりそこからは生徒会室が非常に良く見通せた。綺麗に磨き上げられた窓ガラスを背にするように配置された生徒会長の席は今空っぽで、几帳面に片づけられた机上の様子が見えるのみ。生徒会執行部の面々が既に生徒会室に戻ってきているのは把握済みであり、いかにも生真面目といった様子の生徒会長ならば、普段はすぐに席に着いて職務を開始するということとは調査済みであった。なにしろ、ボンゴレ10代目が一日を過ごす場所である。職員はもとより、生徒の全員に至るまで事前調査はしてある。

この場所に来るまでに張ってあったトラップは古典的ではあるが効果的なものであり、今日に限って席に着いていない生徒会長も、おそらくはあの銀髪が特徴的な庶務がそうさせているのだろう。

(加藤希里。面白い育ちとは思ったが予想以上か)

最初、ボンゴレ調査部から上げられた調査書類を見た時は何の冗談かと思っただが。此処までの危機察知能力を見る限り、奴は本格的に仕込まれている。忍者であることをカミングアウトしている段階で、馬鹿かこいつは、と思っていたのだが、ブラフだったというわけだ。自身が忍者であると暴露した事で、彼がどんな変な行動を取ろうと、大抵の生徒は忍者だし、と勝手に納得してくれる。要は並盛の皆が獄寺の変な態度をスルーするのと同じ事。その間に獄寺はツナを守る為の策謀をめぐらし、あの庶務はトラップをしかけたというわけだ。普通に行動する分には発動しない、あくまでも生徒会長に危害を加えようと行動するものにだけ発動するトラップを。

体勢を可能な限りギリギリに低くすると、かろうじて口論していると思しき生徒会長と庶務の姿が確認できる。断固として主君を諫める姿は好感が持てる。たとえ主君に厭まれようと身を呈して守りきる。普通の高校生に出来る事ではまずない。あまり二人の仲が拗れて、後でコナをかけにくくなっても困る。とりあえずはその忠誠心に免じ、殺気を収めて埃をはたくリボーンだった。

本編3(前書き)

一体全体なんだったんだ？というのが今の椿の偽りない心情である。確かに開会式も無事に終わり、ほっと一息ついたところではあるのだが。普段からキリは、頃合いを見計らって休息の為のお茶請けや飲み物の準備を行ったりするし、そのことにはとても感謝しているけれども。座席指定までされたのは初めてである。

生徒会室には副会長の丹生が「椿会長の名にちなんで」という理由で飾っている椿の絵がある。椿自身その絵の素晴らしさは感嘆しきりなのだが、なにしろ自分の名にちなんでいるということもあって、その絵の下の席につくのは気恥かしくて避けるようになっていた。絵を見ながらというのも大分恥ずかしいのだけれども、絵の下の席に着く自身に向けられるキリの視線に込められる感情が、絵に対して向けられている物であるというのに、なんだかすこぶる自意識過剰な落ち着きの無さに苛まれて、まだ向かいの方がマシだと思っっている。

そんな椿の心情を知らない筈が無いのに、今日は問答無用で絵の下に座らされた。まあ、気に入らない席だと文句を言うほど子供ではない、と思っっているので、キリが申し訳なさそうな表情を見せた事もあって、そのまま休息をとったのだけれども。

「そろそろ仕事をしたいんだが」

自分は何でこんなに下手にでているんだろう、と疑問には思うのだが何故か今のキリには強気で対応しにくい気がする。

「会長。後の仕事は主にクラス委員の担当です。総指揮を執る会長にはできるだけ鋭気を養っていただかなくてはなりません」

「だが、他に通常の仕事もあることだし」

「椿会長、希里君の言うことにも一理ありますわ。上に立つ者として休息をとれる時に休息しておくのも大事な仕事です」

「お前が休まんと私達も休めないだろうが」

「す、すまない」

確かに本当にギリギリまで仕事におわれていたのだ。自分はまだしも女子の疲労はかなりのものだろう。そこまで思っていたれなかった己を恥じる。周りの者に気を配れるキリはきつと自分より素晴らしい生徒会長になるだろう、と思うのはこのような時だ。キリ自身は否定するけれども。

「お前が倒れたら、私が楽をできないからな」

「結局、自分の為だけなのか！」

浅雛の言葉にツッコミはいれるけれども、浅雛が充分以上職務を全うしているのは確固たる事実なので、いつもの軽い応酬にすぎない。いつもの女子達の勢いに、椿が抗えるわけもなく。ようやくと話に一区切りがついたところで席を立つと、今度はキリも何も言わずに後ろに着く。

「いつもキリの配慮には助かっている」

「いえ、会長に不快な思いをさせてしまって自分は従者として失格です」

「理由は聞かない。だが、いつか聞かせてほしいとは思っている」

「後程必ず」

「だったらいい。職務を始める」

「はい」と従おうとする希里を丹生が引き止める。珍しいこともあるものだ。携帯を持っているところからして、早速何か問題事の報告でもきたのだろうか。

全ての問題を自分が背負うことはできない。自分に報告の要無しと丹生が判断したのなら、あとは彼女達に任せるだけだ。

「なんだ？」

引きとめられた事の苛立ちを隠しきれずに、希里が問う。今日は執行部役員としてより、椿の警護に力を注ぎたい。奇妙な殺気は消えたとはいえ、危険が無くなったわけではないのだ。

「うちの者からの報告ですわ。向かいの屋上の人影の補足には失敗したそうです」

緊張感が高まる。丹生財閥総帥令嬢であるこの目の前の女には自分以上の手練が警護についている事は知っていた。そんな彼らが失敗するほどの相手。

「協力感謝する」

「当然のことですから」

普段は金銭感覚のおかしいほんわかした女だと思っていたが。彼女は護られる者としての自覚がある。先程の自分の提案に同意したのもその故だろう。

「警戒レベルをあげるそうです」

「礼は必ず」

「お気になさらないください。ここまで頑張ったんですもの。何事も無く成功させたいと思うのは、皆同じですよ」

他の面々もなんか感じるところはあったということか。とりあえず、丹生に最大限の謝意を示し会長の所へ赴くキリ。その視界に入

る風景に不審な物は今のところ見当たらず、綺麗な青空が広がって
いた。

本編3（後書き）

生徒会室の絵の描写については、他サイト様との被りを指摘されるかもしれませんが、了承はいただいております。

球場においては予想外の熱戦が繰り広げられていた。開盟学園野球部と対しているのは、スポーツ推薦希望者をメインとする中学生代表チーム。素人の綱吉からすると、急造のチームで大丈夫なのか心配だったのだが、山本によれば、殆ど中学大会でよく顔を合わせる面子なので結構チームワークは良いらしい。推薦枠を巡るライバルではあるけれども、そこは同好の士。試合となれば足の引つ張り合いをしたりすることなく、皆全力で戦っているのがよくわかる。他の観客もそれがわかるのか、最初は自分と同じ中学の選手を応援していた生徒達が、学校の垣根を超え全員を応援している。

今は丁度、今回4番を任された山本の打席だ。一層応援の音量が増す。黄色い声援が多いのは御愛嬌といったところか。超中学級と評判の山本を打席に迎え、相手側も気を引き締め直し、際どいところをついてきているらしい。綱吉にはいまいちわからないことだけれども、「一番打者がうまく当てて出塁し、2番が犠牲打で塁を進めさせ、3番は惜しくも打ち取られて勝負所なのだ」とのこと。さすがにわざわざ球場まで見学に来ている生徒は野球好きが多いらしく、そこへ今打席の中学野球界の期待の星の登場で否が応にも盛り上がり、いろんな情報が耳に飛び込んでくる。最初は義理といった感じの黒川や、おとなしめの京子ちゃんも声を張り上げて、一緒に声援している。隣の獄寺は波に乗ってない感じだが、山本のファウルチップに舌打ちをしているあたり、彼なりに気にはしているらしい。いつもの応援では「さっさとかつとばせ」などと怒声だか応援だかわからない声援をする獄寺だが、いつもの試合とは勝手が違うのか何だかおとなしめだ。チリリツと気になることはあるけれども、危険な感じはしないので追求はしない。それぐらいの信頼関係は築かれている。

会心の一打という打球音が響く。

山本の打球がグングン伸びて、全員の視線が打球の行方に釘づけになる。

そんなちよつとしたエアポケットの様な数瞬に。

「なんでリボーンが来てるんだよ！」

頭を抱えてウガーツとなる綱吉。笑顔で挨拶をする京子と、子供の出現にゲツという表情を隠そうともしない黒川は対照的だ。そして獄寺は凍りついていた。

今でこそボンゴレ10代目の家庭教師をしているリボーンだが、本来はフリーのヒットマンである。彼が家庭教師の役を全うした後、ボンゴレ10代目の暗殺の依頼が彼の元に来ないとは限らないし、そして自他共に認める超一流のヒットマンであるリボーンが、かつての教え子という理由で見逃すということはないだろう。敬愛してやまない10代目の成長はめざましく、そしてそれは、リボーンが家庭教師の任から離れる日も来るといふ事を意味している。それまでにせめて10代目の盾になれるくらいにはなっておかなければいけないのに！超直感を有する10代目なればこそ気付けたほどのリボーンの隠形とは頭で理解していても、改めてリボーンの恐ろしさに背筋が凍るところか、己の存在全てが戦慄に戦慄く。

もし、リボーンが暗殺者として訪れたのなら？

10代目の超直感と身体能力であれば、初撃をかわす事は可能かもしれない。だが、それでは自分は何の為の守護者だというのか？10代目をお守りするどころか、10代目に守られてばかりで！

「獄寺君？」

嗚呼、今もお優しい10代目の御心を煩わせてしまっている。己の不甲斐無さに、己が首を締めあげたい気持ちだ。

「御心配をおかけしてすみません。びつくりしすぎてしまって」「本当だよ。何だよ、今日は来ないって言ってたろ?」

そもそも高校の見学会に幼児が紛れ込むなど違和感がおびただしい。確かにリボーンの変装術なら(綱吉はまだにあんな変装術が通用しているということが信じられないのだが)見学者に化けて潜り込むなど可能なだろうが、確かに朝は呑気に鼻提灯で綱吉達を送り出してたくせに。

そんな綱吉の心情などつくにお見通しのリボーンだ。

「気が変わった。久しぶりにスカウトでもしようかと思っただけ」

サーツと蒼褪める綱吉。リボーンのスカウトで集められた人材は確かに優秀なのだが、彼らのおかげで綱吉の胃は常にレッドアラートだ。ましてや此処は地元の並盛ではない。下手にちよっかいを出されたら、自分の将来は確実に引きこもり一直線だ。世間に顔向けなんてできやしない。

「相変わらず失礼なことばっか考えてると、撃つぞ?」

カメレオン色の銃は一見リボーンの外見に相応しい子供の玩具にしか見えないが、その威力は身に沁みて知っている。綱吉の首が面白い位横に振られて、壊れた扇風機状態になっている。

「スカウトっすか?珍しいですね?」

リボーンが着いてきていたことは先刻承知ではあったが。獄寺も

当然事前調査書には目を通してている。毛色の変わった人材は確かに数人いたけれども、リボーン自らスカウトしたくなる人材がいたとは思えない。開会式や、その後の数分に妙な殺気は感じたが、つきり試験の為だと思っていたが、リボーン的眼鏡に合う人材が埋もれていたのだろうか。

心強い味方が増えるのならば喜ばねばならない。ただでさえ、いくら門外顧問を実父に持つとはいえ、10代目の基盤はまだまだ脆弱なものであるのは残念なことに事実だ。9代目が認めている今は良いが、9代目が後何年存命かは予断を許さず、守護者も全員揃っているとはいえ皆が未だに10代の若造。キャバツローネのドンが懇意にしてくれているとはいえ、いざ内紛にでもなれば、ディーノも自分のファミリーを守る事を優先せざるをえないだろう。たとえ個人では親密でもファミリー全体を守るのがドンの務めなのだから、そうなっても責める事はできない。少しでも優秀な人間を綱吉の下につけようとするリボーンの行動には感謝をこそ捧げねばならないのに。

決して顔色が良いとは言いかねる獄寺を、心配そうに見詰めるツナをリボーンは面白そうに見やっっている。

山本の打球は特大のファウルだったらしく、球場全体を溜め息がつつんでいた。

「やっぱりあの回で点がとれなかったのが痛かったのな」

反省会も兼ねた打ち上げは後日別に行うという事で、試合後すぐに着替えてきた山本と合流した。今は球場では次の女子ソフト部の試合準備が始まっている。

野球部の試合は結局両者無得点の引き分けに終わった。開盟側も相手を中学生と侮ることなく、高校野球県大会でも名の知れたエースを投入していたのだそうで、山本は特大ファウルの後、どうにかヒットを放ち出塁したが、5番が三振をとられて終わった。対戦相手が全力で対峙してくれたことが嬉しかったのか、山本はかなり嬉しそうだ。手を抜いたり、抜かれたりするのが嫌いな気性だから、素直に相手投手の凄さを褒めちぎっている。相手が3年生だったので、高校に進学して再戦するわけにいかないのが残念らしい。

ムードメイカーの山本の合流のおかげで、いつものノリに戻った面々は次のお目当てに向かう。リポーンはさつさと姿を消していた彼の「スカウト」とやらは激しく気になるが、自分でどうにかできるわけがないと思う綱吉は滅茶苦茶諦めが良くなっていた。とにかく今はこの見学会を楽しもうと割り切っている。先程の獄寺の様子は気になるけど、今聞くべきことではないだろう。

料理教室は、ただでさえ女子の見学希望者が多かったこともあり、抽選制となっていて惜しくも外れたのだそうだ。料理が得意な京子は残念そうだったが、さっぱりした性格なので黒川と次の予定は立てているらしい。綱吉は化学実験教室とか、初心者からの百人一首とかだったりしたら正直嫌だけれども、京子ちゃんといられれば幸せなので、そういった段取りはまかせっきりだ。山本もお目当ての

試合で充分満足なのか他のことは気にしていないが、この見学会は文化祭のような催しとは根本が異なるので、全部が終わるまでは帰れないことになっている。かなり広い学舎なので見て回るだけでも時間は潰せるだろうが、様々な企画が目白押しなので飽きる事はないだろう。

「それでね、今度は映研とオカルト研究会主催の映画鑑賞に行こうと思うんだけど」
「オカルト？」

お化け嫌いな綱吉にとっては鬼門な分野っぽい匂いがする。

「去年、映研がホラーのショートムービーで賞を取った奴を観れるらしいけど、6禁じゃぬるんじゃない？」

「6禁ってなんだよ？」
「そのものずばり、7歳以上なら大丈夫なホラーなんだって。去年まではネットでも観れたらしくって、結構評判は良いんだよね」

黒川の話によると、別段それ程恐ろしいものではないらしいのだが、綱吉の頭の中は警報が鳴りっぱなしである。だけど、大好きな京子ちゃんの前で6禁の映画すら観れない、なんて姿はさらしたくない。日常的に理不尽な家庭教師や先輩にもたらされた恐怖にくらべれば、なにをするものぞと心を奮い立たせる。某作品のように、画面からでてくるわけでない。

「面白そうじゃん。行ってみようぜ、ツナ」

「てめえが仕切るんじゃないよ！」

「獄寺君、他にお目当てがある？」

「いえ！何処までも十代目にお伴します」

「じゃあ、行ってみようよ。まかせっきりで悪いけど」

「いつものことですよ。今更気にしてないわよ」
「皆で映画って初めてよね」

美形が出演しているらしいということで乗り気な黒川や、皆で映画を観れる事を素直に喜ぶ京子の先導で視聴覚室へ向かう一同。行く手に待ち構える恐怖を未だ彼らは知らない。

「どこが6禁なんだよ!」

「私にあたらないですよ!私だって知らなかったんだから!」

「あれはもう15禁でもおいつかないのな」

「フクロウは可愛かったと思うけど?」

綱吉は声も出ない。気絶しなかったただけ褒めてほしいくらいである。本気でちびるかと思った。直前にトイレに行っておいて良かった。未だ真つ青な顔の綱吉。他の面々も似たり寄ったり。例外は京子だけだ。悲鳴すらあげなかった彼女は、映研の人達を悔しがらせ、何故だか賞品までゲットしていた。

はつきりいつて詐欺だ、と思うのだが、あの作品が6禁ホラー賞受賞作品なのは間違いのない事実なのだそうである。審査基準はどういったものだったのであるだろうか?ちなみに、メインキャストが卒業を控えている事もあり、第2弾が企画されているらしい。絶対に観るものと心に誓う。

最初、目的地に近づくにつれ聞こえてくる阿鼻叫喚そのものな悲鳴に、雰囲気作りには大袈裟だと思った一同。ショートムービーという事もあり、少人数のグループで随時観客は入れ替えているらしく、運良く5人で鑑賞できることになった。いかにも高校の映研の自主制作といったタイトルに吹きだしたまでは良かったものの。

うん、あれは怖いよね。普通に怖いよね。確かに血飛沫だって残酷シーンだって無かったけどさ、登場人物が次々顔出してただけだとき。絶対に6禁じゃないよね!!! 終わった時には放心状態の一同(例外あり)。はつきりいって此処までどうやって歩いてきたのかすら覚えていない。他にも座り込んでいる面々は綱吉達より前にアレを観たのだろう。はつきりいって具合の悪い生徒を集めた保健室のようだ。本当に保健委員と思しき高校生が面倒を見ているのがシヤレにならない。どうせなら企画自体を中止してほしかった。次々と担ぎ込まれる傷病兵。その場のノリは野戦病院だ。

多分来年はこの企画ないんだろうな、という綱吉の予測は正しい。

本編5（後書き）

黒川花の口調がわかりませんでした。

本編 5・5 (前書き)

おまけです

五月晴れの爽やかな日差しが差し込む生徒会室は、今、異様な雰囲気にも包まれていた。

理由は簡単。生徒会室の斜め下に視聴覚室が位置していることにある。

各部活ならびに研究会等々からの見学会への参加申請書を審査していた時。映画研究部とオカルト研究会からの連名のホラームービー上映の申請は、融通の利かない椿には許容範囲外であったのだが、どうも上映予定の作品は、6禁ホラー映画賞とやらいふマイナーながらも賞を受賞した作品らしく、その名が示すように7歳以上は視聴になんら問題の無い健全なホラー映画ということだったので、そういうことならと認可印を押した。山のように申請書が提出されていた為、その場で内容を直に確認しなかったのが生徒会最大の失点である。

後日、ようやく暇な時間に内容を確認した椿は、申請を却下しようとしたのだが時既に遅く、職員会の認可も受け最早取り消せなくなっていた。なにしろ、職員も参加しているという映画ということ、職員と生徒の良好な関係を示せると思われたらしい。申請の際、その職員が誰であるかを明確に示さなかった点は明らかに作画的だが。

下から轟く阿鼻叫喚の悲鳴の数々。その度にフラッシュバックするあの映像。蒼褪める椿。次々と保健委員から送られてくる救済要請。

生徒会執行部の多忙な一日は始まったばかりである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1794z/>

SD試作

2011年12月13日10時55分発行